

エリオットと木戸^{たかよし}孝允の往来について*

今 田 見 信**

私は、昭和15年10月に非売品で出版した「小幡英之助先生」の67頁に木戸孝允日記によって木戸がエリオットを訪れた年月日を紹介したことがある。

その紹介に見落としがあるので訂正して置きたいと思って、茲に出題した次第である。その旧著には

明治3年 9月4日, 7日, 8日, 9日
10月21日, 22日, 23日, 24日, 28日
11月14日
明治4年 2月2日, 3日
5月27日
9月朔3日
10月25日, 26日
11月11日, 12日
明治6年 8月11日
9月5日の20回と書いた。

ところが、今回再び日記をくってみる機会を得て確認したところ

① 明治3年9月に5日, 6日

② 明治4年10月に2日

の3ヶ日が落ちていたので追加したい。また明治4年10月2日には「過日来歯根痛を、今朝…(空白)…来て其歯を脱抜す10時過」とあって、東京にあったエリオット以外の某医（口中医か）が木戸の歯を抜いた記録があったことを追加して置きたい。

木戸^{たかよし}孝允について

長州藩医和田昌景の家に生れ（天保4（1833）年）通称を小五郎といった。

天保11（1840）年桂五郎兵衛（150石）の養子となり90石を嗣ぐ。

慶応元（1865）年木戸貫治と改名、翌年更に木戸準一郎と改む、一時新堀松輔と変名したこともある。

号を松菊又は木圭といった。

嘉永2（1849）年吉田松陰の門に入り、嘉永5（1852）年江戸に遊学、九段に道場をもち（神道無念流）江戸随一の剣道の達人、斎藤篤信斎（弥九郎）の門に入り、剣術を学んで遂に塾頭になった。

嘉永6（1853）年には、江川太郎左衛門にも入門して洋式兵術を学んだ。

安政5（1858）年結婚後はじめて任官して江戸詰となる。万延元（1860）年藩学有備館館長になった。

かように主として江戸にいて薩摩、水戸、越前藩の尊攘派と親交した。はじめは必ずしも吉田松陰に傾頭していなかったようだが、松島剛蔵とともに、水戸藩士と丙辰丸の盟約（破成の約）を結ぶに至り漸次幕閣改造運動に挺身するに至った。

文久2（1862）年5月藩命で京都に上り、周布政之助等とともに公卿間を奔走して尊攘運動を推進し、長州の藩是である航海遠略策の撤回を画策した。

主として京都にいて尊攘運動の指導的役割を果たした。この間彼を庇護した芸妓「幾松」はのちの松子夫人である。

木戸は元治元（1864）年5月の禁門の変*で一時的に馬出石に潜伏したが、翌年藩政の転換で帰国し、高杉晋作らと共に長州藩の富国強兵、討幕政策推進の中心的役割を果たした。

* 註：禁門の変とは長州藩主父子の雪冤と、尊攘派7卿の赦免を願ったが許されず、さらに翌年6月、池田屋事件で藩士が殺されたため、進発の勢が急に盛となり、遂に福原越後、国司信濃、益田右衛門介の三家が兵を率いて上京、7月18日長州征伐発令、会津・薩摩両藩兵が蛤御門付近で戦って敗北した事件である。長州征伐の発端となった変（6月5日8時の事）だ（木戸は時間が早くて池田屋を引あげた後だったので難を逃れた）

* Relations between ELLIOT and Takayoshi KIDO

** Kenshin IMADA（本会理事）

薩長同盟締結時には長州藩代表となり、高杉晋作歿後は藩の代表として、西郷、大久保とともに明治維新を築いた。

明治政府成立後は総裁局顧問、外国事務掛を兼任、五ヶ条の御誓文（明治元年3月14日発布）起草に関係し、明治3（1870）年参議となる。大久保利通とともに明治新政府の中心人物であった。

木戸孝允日記について

明治元（1868）年4月から病歿する明治10（1877）年5月までの日記である。政界の移り変わりや、裏面の動きを知るには最上の記録である。

明治5年11月12日大久保利通と共に横浜を出発して渡米した。

大久保は明治6年5月26日（旅中3月19日に召をうけて）一足先きに帰国、木戸は同年7月23日に帰朝、岩倉大使は9月13日帰朝した。海外風物のこと一行の内紛の経緯が事細かく書かれている。木戸は平素国事に参画し忙繁寧日なき間にも、常に単冊を携えて一日の中に生起した事件を書き留め、感想も日記に書き加えて残した。特に重病のために進退を失なうに至る時まで、一日も記事を欠いていないことは、まさに驚きである。

そして悉くが自筆の原本で、25冊、美濃紙四ツ切の大きさの有野冊子本で、そして殆んど墨書（僅に洋行中がペン書）であることに特色がある。現在原本は宮内庁書陵部で1冊づつが絹布に包んで、小型の桐箆の引出に収蔵されているという。

同所には別に「木戸孝允手記」と称する自筆本2冊を蔵しておる（嘉永6年正月から安政2年正月までのもの）が、未公開である。

孝允日記は永く木戸侯爵家に秘蔵されていたが、「松菊木戸公伝」（妻木忠太）の編集に当り、はじめて披見を許されたものである。

昭和7年12月に第1巻が出た日本史籍協会のこの日記が出るに当たって、はじめて公開されたものである。

私が「小幡英之助伝」を書いた頃は、私には直接見ることが出来ず小幡重一博士を介して和田航空研究所長から一週間拝借してぬき書きしたために見落したものである。以下に見落箇所を含めて木戸がエリオット

の診察を受けるために横浜に到着した日から横浜を去る日まで、その年月を追って再録しておく。

木戸孝允日記（日本史籍協会叢書74）

<第1巻>（昭和7年12月25日初版）

明治3年9月2日

……今日より横浜に至り 齒痛を洋医に見せん（と）欲す、山県狂助同行の約なり、伊藤も来俄に横浜行を催せり十一字頃相発し三字過横浜に達し、通商司役所遠藤の寓に達せり夜伊藤 遠藤と「今村」に至る正二郎来泊。山県は山城屋に至れり

同3日 曇六字伊藤に帰る伊藤寛齋来る、依頼して米医ヘボンを訪ふ、ヘボンの気付にてエリアタを又訪ふ明日より齒齲の療治をなさんと云

同4日 曇九字頃エリアタを訪ふ 齒齲え薬汗をそそく伊藤寛齋と又エリアタの居に至るエリアタ両手を漆の為に損し来る六日より真の療治にかからんと云今日東京へ書状を出す、今夜山城屋に余を招く六字過彼家に至る遠藤亦来る 十字頃相去散歩して帰る。昨夜英字等の新聞紙を見る仏遂々敗走ナポレオン被擒の説あり世間真説なりと云今日又仏の新聞を見る弥ナポレオン擒らへらるるの説あり雖然仏人ハレス今以降るを 不欲仏人益憤激すと云正二郎来泊

同5日 曇時々小雨八字半エリアタを訪ふ 又薬汗を齒齲にそそく昨日の薬と異なり 帰途々中にて伊藤寛齋に逢ふ又相共にエリアタの居に至る 明日八時半を約す遠藤今朝より東京に至る

昨日林半七より書状到来余に 急速帰京の事を岩卿に促し云々也正二郎来泊

同6日 晴八時半エリアタを訪ふ 伊藤已に来在 当地の医師（空字）尋来又エリアタへ同行す 曾て於浦賀面会せしと云正二郎来余に 従行すること日々也今日齒九本を脱抜其根深もの 六七歩痛徹骨終日出血不止食事尤困却す四字過青浦来る 大島も同行なり三条卿の御使者（空字）御書翰を持来余に 急々帰京の云々也頃日廟堂肝要事件の 會議ありと聞ゆ余国事の為に馳る元より死生を不図也雖然 今日大治療をなし大に未半途なるものあり「兩三

日の猶予無妨事に候へは今兩三日治療を加へたし依て此由を答書一左右により去留を決するの覚悟なり」大島来る共に佐の茂に来る

同7日 雨八字半エリアタを訪ふ伊藤父子已に來在齒に藥を加へ虫歯へ銀塊を 入正二郎來虫歯を金にて塞く本山新二郎来る十一字過大島の 寓伊勢文に至る九字頃帰家今日齒痛甚敷夜亦不能寝

同8日 雨八字頃エリアタに至る 帰途伊藤寛齋を訪ふ干時風雨甚烈十二字より一字二字の間尤激烈処々の屋瓦皆飛墻垣皆崩或は屋の潰倒の為に死するものありと云四字頃に至漸穩なり 今朝陸奥陽之助等歐洲に発し仏の飛脚艦にて此風浪の難如何と懸念せざる得ず五字頃大島を訪ふ頃日気分不快故不堪長座七字前帰寓

同9日 晴又曇又雨朝伊藤寛齋来る昨夜も彼來り疹* 特別に異なることなし全身にほうせ発す遠藤江戸より帰る大島來訪今日人所托の白箋へ揮毫す三字後エリアタを訪ふ外国店にて綿鏡等買得す 帰途伊藤を訪ふ干時東京風雨の風説を聞昨日深川へ行幸あり調練の天覧あり干時還幸の節尤烈風永代橋を落し、終に新大橋へ御廻なり 其途中処々の長屋等も倒潰怪我人死人等あり青木謙蔵も此災難に斃ると云謙蔵余の旧知人 実に善人也。逢ふ此難に不堪 慙然也。帰る寓服藥養病 又山城屋東京より帰り余を訪東京の風説如前（今朝エリアタより所与の齒藥を用ゆ）

同10日 曇朝伊藤來疹大島來訪 九字過相発す。遠藤、山城屋、本山等船まで余を送る。正二郎も昨日來、來泊。又船まで來、揚碇之時は十字前也一字過築地に來着。伊藤に至り食を認め其より岩倉卿に至り六字過帰家 野村來話帰途風邪の気味にて惡寒あり。

同11日 晴 平臥藤井勉三 藤田与次右衛門 能見隆庵、内藤次郎左衛門、江木 清二郎、伊藤芳梅、広沢障岳等來訪。小酌相談。遂々皆散与。伊藤訪 吉富横山文典医來診夜福井亦來疹

同12日 晴終日平臥横山來疹

同13日 曇終日平臥横山來疹 後藤象二郎來話。明日より帰国の由也。板垣亦同行なり。土州国情

* 註：疹は診の間違いか、以下随所にみえる。

過日來の云々漸鎮定すると雖も、未至に無事。依て兩氏此度帰国せり。此藩の国情不定も亦大に今日の方向に關係せり。河瀬來話

同14日 雨……（前文略）

今朝吉富一家のものを誘ひ向島に至り十一字頃皆歸る、同十五日は四字後神田邸を訪れ、九字頃帰家、同十六日は染井別荘に至り六時頃帰家。同廿二日は天長節に付参朝の達しがあったが「過日來為病参朝猶予あり不参」御所より酒肴八丈二反を玉ふ

同24日 雨八字過参朝御前會議……（略）

10月20日 雨十二字シミツと有約野村素軒を同行す 今夜又素軒伊藤寛齋、大黒屋禎二郎等と崎陽亭に至る。今日シミツの話に李仏の戦仏人益奮激皆戦闘の用意をなし只斃て休矣の決意なりと平定の期可未謀（今日穴戸三郎横須賀に至り 帰途來り尋と云）

同21日 晴九字過素軒帰京今日柏村数馬、杉孫七郎、奥平数馬等書狀到來九字過エリオトの出張に至る齒齲を療治す伊藤長翁父子も亦來十二字帰宿 夜中島四郎來話

同22日 雨十字伊藤寛齋来る共にエリオトの出張に至る 療治如昨日 十二字頃帰宿 光田三郎周布金槌来る 夜岡（空字）竹田庸二郎來話

同23日 細雨九字過伊藤貫齋来る共にエリオトの処へ至る総て如前日 十二字帰宿 岩卿、広沢、山尾、吉富等へ書狀を出す 今夕伊藤長翁と有約、五字至彼宅認酒飯、明日寛齋至東京（彼過日中典医の命あり）留別之意なり 長翁二子二孫皆在席中山槐宇亦來て同飯す、槐宇は余十五六年前浦賀に留学せし時浦賀の与力也 子新太郎と東条麗蔵と学蘭書 此時鶴殿幸八亦左門此生越後長岡の藩にて忠直の士也 後幕に被挙近來死去せりと云可惜之士也 夜雨九字頃帰宿（各略）

同24日 朝如前日エリオタに至る帰途 シミツを訪ふ 今日 寛齋の息エリオトの処に至り通弁す（曾て民部公子と仏国に至ると云）今夕竜驤丸に有約一字過小蒸氣船にて迎に來る 二字前艦に至る。中島四郎在艦船將（空字）副將兼坂熊四郎々々は十年前之知己也 艦中を一見す、且酌酒談時勢又語旧 五字帰宿夜柏村（空字）檣崎頼三郎來

る両士は不日仏国に渡海す共に佐の茂に至り酌酒毛利藤内亦共に遊学の志あり過日来て滞横浜今夕来て相談、大黒屋禎二郎も来て助座十一字頃帰宿。

同25日 風雨昨夜四字頃より腹痛胸痛甚激屢下痢を催し七字頃に至り漸緩六七度大熱相発脈度凡百廿一度十二字後病勢大に屈す、十字頃伊藤長翁来疹服薬を調合せり沸騰散と（空字）三字過門人（空字）来疹す、夜周布金錠来話

同26日 晴今日病大に緩也、九字頃伊藤長翁来疹夜光田、曾根、又橋本来話せり

同27日 曇今十一字シミツと有約彼居に至る、共に十二字五番の会食に行始て会食所の家宅の居置間取を見る 其規則実に妙自然と患者亦不得不知 其より一旦シミツの居に帰り又共に フランス軍艦（空字）に至る、帰途大雨衣服如洗四字過帰艦 今日竜驤丸の艦将手島五一郎副将兼坂熊四郎と約し崎陽亭に至る 干時雨又甚 九字頃帰宿 光田三郎来話、大久保の書状到来弁事よりも御用状来る皆帰京の催促也（田村幸（空字）同道せり、手島、中島四郎同伴）

同28日 快晴宮川土木正の来訪元熊本藩にて宮川小源太と云 十一字エリオトを訪ふ有客三字の来約をなす今朝山口の杉、柏村 奥平 和田 平原浪華の井上、山田等へ書状を出せり 有富源兵衛の手代自蝦夷より帰り来り尋 三字エリオタの処に至り告暇、水菓を贈る、七字英人センデと有約シミツ正二郎と同道彼の寓に至る、外国人同客七名あり、其中一人士官 去年センデと 同箱根宮の下へ来れり、十字過帰宿

同29日 晴十字弘明丸に乗艦一字永代へ着す、伊藤（空字）も同道せり、二字過林半七の宅に至り岩卿へ出迎情を承得せり、五字過帰家

11月13日 晴昨夜十二字揚碇房州に至る 風浪甚烈終に燈明台を見分する 能はず、十一字相州剣崎燈明台に至り諸器械を揚げ三字過に至る、六字頃横浜に着舶、正三卿大久保と 一同通信司令舎に至り相泊す余直に正二郎の処に至り携帰り相泊す

同14日 晴九字正三卿大久保帰京 余はエリオタ之処に至る、十字過馬車にて相発一字過築地に帰り伊藤の宅にて午飯を認、大隈を訪ひ、帰途神田邸に至り又広沢を訪ひ七字帰家、井上弥吉来泊

明治4年2月朔日 曇北風甚烈六字過 横浜着艦上陸甚難与、三好直にシミツ之居に至り正二郎にも面会通商司出張所に宿す、曾て遠藤謹助の所居当時坂田通商権正之居也、坂田は肥前之人也、池上来話内海も亦来、爾他客来甚多余從神戸乗艦其前気分甚悪、勉て当港に至る気色又閉塞、欲朴奮勵稍蘇然して発熱頭痛、医者羽賀（空字）来疹、斎藤新太郎、藤井八十衛来る

同2日 晴内海其他来訪、二字過まで臥蓐与諸氏散歩し余齒医オリハタ之所に至り又字公使を訪ふ、且今日公より賜る所の漆器縮緬等を公使とケンフルマンに送る、今日は李王生日且李国戦勝之祝をなせり、李館甚修飾祝砲花火等を行へり、夜与諸氏会飲談話（李人雇人に付公使チンフルマン余程周旋せり）

同3日 晴朝周布金錠 小倉右衛門介 河野光太郎来訪、皆明日より洋行せり、三子と余曾て周旋する所也、在留之人に伝言し且用事を託せり、九字エリオトを訪ひ齒薬を受けり、十字過横浜を発し一字前大森之梅屋敷に至る 干時梅花は開落せり、二字河崎屋にて食事を認、井上世外より人来る依て世外を訪ふ、杉、宍戸、野村、藤井、井上弥吉、赤川雄三等に逢ふ、五字過帰家、長、三浦、小野、杉山、井上、河村、佐々木、加藤、斎藤、天野、沢、畑其他客来数十人也、相酌相談又共に時事を大歎し故友障岳之事に至り不堪語、大隈も今日来て余の帰家を待と云 昨日も余帰家を聞来るもの十余人ありと云、神田邸より兵八人来て宿直す。

<第2巻>（昭和8年3月25日初版）

明治5年5月26日 晴曉三ヶ本燈明台沖を過、十一字横浜に入る（注・山口帰郷のあと神戸からである）無間上陸本丁四丁目肥前屋に泊す大久保同宿なり正二郎并谷梅之進從者三人の外皆直に東京へ帰せり主人七兵衛此度の飛脚船にて同船せり不図船中にて出会我宅へ案内せり内海（空字）来訪四字過大久保と外国売店へ同行せり七字前帰る 英人シミス再度来訪七字過より 同道（空字）会食処へ案内せり九字頃帰宿今夕本山新二郎来る 夜大黒屋禎二郎来訪（東京横浜辺の風説に 余等過日神戸の

難風に覆没の聞ありと)

同27日 晴八字頃大久保出立帰京せり 同時外出
エリワタ之処に至り齒根を療治せり其より外国店
を散歩し正二郎歐洲行の衣類等を外国人へ注文せ
り正二郎梅之進等を携へ九市の写真店に至る十一
字過宿に帰る今日炎熱甚し乍去未山口帰郷中の炎
熱にあらず当年西国は梅雨中絶て雨を 不見関東は
始終雨ありと 云晩刻大黒屋貞二郎小田原大参事大
久保弥右衛門の男(空字)を誘来る 内海誠一も来
訪夜元米沢藩堀尾某を同道来話(堀尾は 癸亥頃京
都にて長州人と往来せしと云) 今日薄暮纔に 雨あ
り

同28日 晴伊藤大典医来話八字前 横浜発車蒲田
梅屋敷にて小憩し鮫洲河崎屋にて午飯を 認三字前
帰家天野清介、小野石斎、宍戸三郎、山県狂介、
三浦五郎、福井順造、斎藤新太郎、山尾庸蔵、長
岡誠助其他数十客来尋、福田道二郎昨日より 同行
のもの一同余の家に寓す(岩卿より使者来る)

8 同29日 曇八字神田邸へ至る 今朝工務省より
条公へ馬車を繋ぎ来るの約をなし置しに已に 到九
字て不来不得止從三位公と同車して条公に至る 又
工務省に至る漸其齟齬せし所以を知る 十一字頃蒲
田に至る池田從三位、從四位二公に会せり中飯を
認め一字前金川に至る。山尾庸、佐畑健其他に会
し蒸気車に乗り横浜に至る。肥前屋へ泊す昨夜井
上弥書翰を贈り明日川崎より蒸気車を以余等を 横
浜へ送るの筈なれとも先日の風雨にて 道路破損不
得止の次第を申越せり

、同9月朔 晴シミツ来訪暫相語る。十字過(空
字)公に陪しエリオト之処に至る今日イタリヤ海
軍士官の葬礼を見物せり三字過より(空字)公を始
池田御父子蒸気車にて御帰り也四字過より 与杉
猿村佐畑に至る。九字帰宿佐の 茂(夜三字頃地震)

同2日 曇知事陸奥を尋ぬ、内海も 在坐相共に
散歩して天主堂を一見し(空字)ホテルに至る
干時山城屋与、猿村来会 一字前散て余は馬車
を見物し、内海 山城屋伊勢山に登り

大神宮を拝し山上を散歩す。干時山下に 過日来
蒸烟騰起し土石甚熱す、依て土人其元を 探らんと
大に其趣向をなせり、帰途直会殿にて小憩し其よ
り佐畑を訪ひ同社にて山城屋に至り余は 又大黒屋

を訪ふ。不在。五字帰宿内海佐畑等と 相話 英人
(空字)来る陸奥陽来る。六字過より 内、佐、陸、
杉山等と山城屋に至り対酌相談 十字帰臥

同3日 晴九字仏公使ウートリーを 山尾陸奥と
訪ふ。談話数刻、其より陸奥と別れ山尾と 米医エ
リオト之処に至り齒凹を金塊にて埋む 一字過より
陸奥山尾杉と鉄道に乗り川崎に至る。鉄道も 漸頃
日此辺に達す帰途伊藤芳梅を訪ふ大隈井上等も 来
会、九字帰家。陸奥来泊 岡竹之進(喜兵衛)萩
城に来る 又余の家に寓す

10月朔日 昨夜来大雨終日 家居、福井順 河内
宗 山県狂等来話。夜柏村数 久保断来話 久保
一泊

同2日 晴福井順 杉山耕 長三州来話過日来
齒根を痛む今朝(空字)来て 其齒を脱抜す。十字
過参朝。四字退出。直に外務省に出、六字帰家、
三浦梧、福原恭来談 夜雨

同3日 晴朝斎藤に至る。一昨日江川清女 着せ
し由此度河瀬へ嫁する内約あり、依て先余の 養女
とせんことを望故に其望に任 せり、十一字頃染井
に至る。今日字医シルレル、ホフマンの 両医来る
を約し、杉山耕吉、吉本新誘来る。柴俊海字語を
能す依て又共に来る。談話数時。七字頃相去余も
亦九字帰家 今日染井の 植木屋を一見す。各屋皆
菊花を以種々の形容を作りなせり(杉猿村来る)

同24日 晴朝西辻卿来る 十字前大久保に 至り
其より共に品川に至り同車横浜へ赴く、杉猿村も
今日より一応帰京 刺賀白根重見小田且西郷真悟
等皆同行刺賀浪華に至る 渡辺昇への書状を託す。
十二字過横浜に至る(空字)番にて洋行の 衣服を
注文せり伊藤俊、山尾庸亦出港、今夜大久保へ杉、
山田、一同食事赶赴けり、陸奥来訪(今日より佐
々木和三郎来る)(大黒屋を訪ふ)

同25日 晴佐畑健、竹田庸、陸奥陽、井上弥、
井上聞、伊藤俊、栗屋多 其他客来語 今日(空
字)番店に至り洋行入用の品を求む不図英人 シャ
ンドに面会し又或店に至(空字)等を求む其より
鈴木に至り漆器類を一見す皆今度持行の品なり、
杉刺賀等乗艦 山城屋も浪華に至る 福井順も 亦
出港せり、端場に至り諸氏に 帰るを送る其よりエ
リオトを訪ひ齒療を乞ふ、今夜山尾の招にて(空

字) 屋に至る、佐畑、竹田同席此家に東久世五辻二卿御旅宿にて不図面会

今日福井より斎藤篤信斎昨日死去の事を承知せり、実に余の恩人七十有余不治の病を知ると 雖もまた不堪愁傷也

同26日 曇又晴 朝大屋小参事、丸山等 来訪、大黒屋も亦来、十字過大久保を 訪不在 山尾に至り共に エリオタの処に至る又蘭八番の内仏人(空字)の招きに預り山尾、福井と同行昼食を認め一字帰宿竹田来る共に鉄道局に至り 三時過発車 四時品川に至る、東久世、五辻二卿、村田新八等同車なり、帰途鹿島を訪ひ又井上新一郎を訪ひ、九字過帰家

11月10日 晴朝来客 七八十人 一字過告别出門 其より大久保に至り同車品川に至る、品川にて岩卿始に会し其より汽車にて五字横浜に至る、此間二字間也、鈴村へ相泊す 今夜蘭公使の招請に預れり、各国公使米を除くの外皆来る 九字過帰宿(鍋島、東久世共其外同行の華族来訪)

同11日 晴朝来々客不絶 十一字過商会において井上世外、山県素狂、西郷真悟、吉田(空字)芳川(空字)等別杯の宴を設けり 帰途黒田了助を訪ふ、此度了助世話にて開拓より婦女五名を米国へ為留学遣はせり 婦女の海外へ留学する 此行を始とす、二字過エリオト之処に至り又シミツを訪ひ告别 五字高崎屋に至り大久保と 同車裁判処の後坐屋に至り外国公使を招請せり 十字帰宿

同12日 晴九字出宿 裁判処に至る洋行の面々皆此に備ふ 十字前後飛脚船(船名アメリカ)に乗込、余等岩卿と一同小蒸気にて本船に至る 送て海岸に至るもの数百 理事書生并に 随行等のもの合て百余人 人名別に記せり、十字祝砲 十九発を我軍艦より発せり 一字揚碇横浜を発す、薄暮尚房総の山富岳等を見る*

明治6年8月9日 晴山県狂介来訪 昨夜 井上より余に書状を投し山県の発途をとどめり 其云々

なり 九字出家至横浜 宿鈴村、仏蘭英米魯の諸公使を訪ふ英仏而已在宅面会せり、米と魯は 其妻面会す 昨日河北義吉田大蔵少輔等と 帰朝 河北直に来訪今夕より出京余の宅に至れり、中島作来訪 彼今日より長崎に至れり、夜ハーソンを訪ふ不在(当県典事蘆高郎為余通弁せり)

同10日 晴ハーソンを訪ふダイヤモンドに 面会す 不図モリーにも出会せり、ダイヤモンドの性実 実に云々甚不堪ものあり、十二字帰宿 山尾一家妹も亦来倦六字より皆帰京、夜居留地を散歩す

同11日 齒匠エリオトの処に至り其より 英店五十九番に至り又パーソンを尋ね十二字過帰宿、二字頃纔に白雨来る終日南風尤烈、四字出車 品川より車を下り井上老人を訪ひ又斎次を訪ふ、不在 伊藤の留守に至り家内と相話し少女などを見 其より山尾に至りまた高輪の御館に至り 御夫婦様へ謁し食事等認 七字過辞去斎次柏村まで来り余の帰途を待てり依て相共に又山尾に至り一泊す

9月5日 晴鳥尾来訪 八字過出門 九字新橋ステーションに至る、不図ハーソンに 面会す、十字至干横山大倉同行なり、横山とエリオトの処に至りまた五十九番に至り大倉屋にて食事を認め 三字ハーソンを訪ふ、已に帰て在干ホテル 彼の心事を聞得し遺憾不少 彼明日乗艦明後朝出帆の積りなり 六時横浜に出七字前品川に着山尾に至る、柏村、竹田、財満、井上等と同食す、余は終に一泊せり

同月6日 晴高輪邸に至り 従三位公御夫婦に謁し華族御集會に付愚考を陳述せり

其主意は当時の華族自己の責を不思 無益の交際に時日を消せり、依て各互に其責を論窮し 国家の為に尽力するの志を起さんことを欲す、故に華族の集會へ議長を定めんとす

* 註：13日より翌月7日まで25日間太平洋を航し7日サンフランシスコに着航、カランドホテルに着、明治6年7月23日横浜港泊帰家「来客万席」